

人材こそがこれからの「地域の特産品」

アクセンチュア株式会社 アナリティクス 日本統括 工藤 卓哉 氏①

工藤 卓哉



○プロフィール

- ・アクセンチュア アナリティクス 日本統括
- ・佐賀県 データ利活用プロジェクト 統括
- ・Accenture Data Science Center of Excellence 北米地域統括

(略歴)

1997年、慶應義塾大学を卒業後、アクセンチュア入社。経営コンサルタントとして活躍し、2004年にコロンビア大学国際公共政策大学院で学ぶために同社を退社。同大学院で修士号を取得後、ブルームバーグ市長政権下のニューヨーク市で統計ディレクターとしてデータを使った行政改革を推進。データサイエンスに関する数多くの著書や講演活動を行っている。

ICT利活用で変わる社会の姿

<課題>

- ・日本では少子高齢化が進み、様々な課題が出てくる。過疎化も進み、職業にも人工知能が入ってくることで業種の境がなくなる。

<提言>

- ・地方や地域だけに目を向けず、世界で戦えるスキルをもった人材育成を行いたい。
- ・データサイエンスやプログラミングはその技術自体よりも、失敗して学び、決められた答えがないものを自分自身で失敗しながら見つけたさせる人材育成につながる。
- ・人材こそがこれからの「地域の特産品」となる。

<実現のために必要なこと>

- ・私の事業部門では慈善事業として全国各地で「ロボットプログラミング学習」を行っている。
- ・鳥栖市でも機会をいただいたが、総合学習のなかで子供たちが自由に失敗して試行錯誤できる「大人目線で答えを与えない」教育が必要ではないか。

「リスク」がデータアルゴリズムによって「チャンス」に変化

アクセンチュア株式会社 アナリティクス 日本統括 工藤 卓哉 氏②

ICT利活用キーワード

- ・ 1年前は「データアナリティクス」という単語は単なる流行の言葉（バズワード）にすぎなかったが、もはや当たり前になっている。
- ・ データを活用できない企業は成功できない。
- ・ ICT利活用はリスクをチャンスに変えることができる。例えばGoogle社。インターネット上に情報が溢れて探すことができないというリスクを改善したものが「検索サイト」。お金も産むし人々のリスクも解消できている。
- ・ 農業もデータサイエンスを使うことで、例えば作りたい料理に合う野菜をつくることも可能。
- ・ これからは生産量や価格ではなく、料理人や料理店にあわせた生産で付加価値や差別化ができる。加工業者や料理人が生産者を探す時代。

【参考】アクセンチュア・アナリティクスを率いるデータサイエンティスト

<https://www.accenture.com/jp-ja/meet-the-team?src=SOMS>

佐賀県の評価と今後の未来について

＜佐賀県の評価＞

- ・ 自治体の中でいち早くデータ利活用を進めている先進地域と言える。例えば救急車でのデータ活用では、救命士や医師がデータを入力してくれていてデータが非常にキレイで分析しやすい。これは世界でもあまり例がないこと。

＜佐賀県の改善点＞

- ・ 佐賀県のICT利活用は全国的には知られているが、佐賀県民があまりご存じないことに驚いた。
- ・ 「佐賀県民が成果を実感している」という成果指標がないことが残念。
- ・ 一部の部署はデータ活用にも後ろ向きでネガティブさがあった。部署間でギャップがおおきい。

＜今後の未来＞

- ・ 現在は「リスク」となっているものがデータアルゴリズムによって「チャンス」に変わっている。
- ・ 例えば自動運転やロボティクス、そして農業分野など。学歴や身体の障害もなくなってくる。
- ・ 情報がどんどんとオープンとなり、顧客が強くなる時代が来る。嘘がばれるようになり、例えば食品表示や選挙制度も変わってくる。